

の教育が出来ようものぞ。

又幼稚園で唱はせる唱歌などにしても歌詞位は印刷して家庭に通じて置き度い。實は家庭の方で聞きゝに來て然るべきであるが、多勢のことであるから幼稚園から頼つた方が便利であらう。そして、子供が家庭へ歸つて其の歌を唱ふ時、思ひ掛けない歌詞の間違ひがあることがある。一寸訂正

感 官 の 練 習

一、その意味

心理學者の云ふ所では、昔から云つてゐる眼鼻耳口皮膚の五官どころではなく、壓温冷痛運動等を感知する機関が、十も十餘も吾人の身體に具つてゐるとの事である。その一々に就ては別に茲に述べないが、すべて感官は吾々が外部の世界と直

してやつて欲しいものである。之れは前に述べた習慣養成に比べれば小さいことであるが、之れも協力者たる當然の用意である。其の他數へてゆけば、あの事にも此の事にも、もう少し家庭と幼稚園とが協力者らしく其の實を擧げて欲しいものである。

文學士 大 槻 快 尊

接交通する、第一の門戸である。外界の作用を受け入れて、心の一部分とする際の入口は、この感官であつて、世界に關する知識を得る唯一の入口である。若しこの入口の一つでも閉ざされると、それだけその世界が知れなくなるのである。この門戸が悉く閉鎖せられて居たならば、人間は骨と肉とで作られた、蠟細工の人形のやうなもので、世間

と云ふものは、その人には少しも存在しないのである。かゝる人は世間と没交渉であつて、世間と云ふことは全く無意味のことになる。丁度夢をみない長い夜の眠りに陥つたと同じである。感官があるからして始めて外界を知り、其の意味を知ることが出来るのである。吾々から一つの感官でも取り除いたならば、恐らく今迄と全く異つた世界観や人生觀を懷くやうになる。眼や耳の缺けてゐる、生來不具として生れつゝいた盲人や聾啞者は如何でしやう。普通兎が遊戲に於て現すやうな、知能の發達すらも遂げることは、非常に困難である。盲人には光とか色彩とかの印象がない丈けではなく、觸れると云ふ事の外には、事物の形體を知ることとは出来ない。更に進で吾々に更も大切な、記憶の補助としても必要な、文字や書籍は何等の役をつとめない。聾啞者にも音響の世界は全く缺けてゐるので、音樂詠歌談話等の全部は、全く無意味なものである。僅かに前者にては觸覺が、後者

にては觸覺及視覺が、其缺陷を多少補ふのであるが、それとても極めて僅少の程度にしかすぎない。

兒童がこの世に生れた當時は、恰も人形と同一であつて、感官は具つてゐても、其活きが少しも解發されてゐないから、光と音との世界に來り乍ら、見聞覺知する事は出来ない。臭も味もない世界へ現れたので、少々針でひつかゝれても痛を覺えない。感官は形がある丈けで、外界を告げ知らす役目をつとめてゐない。幸に感官の活動が開發されて來るので、之をたよとして、一々かゝる事柄を學で行かねばならぬ。若し感官が働かない時には、丁度立ち上る方法がないので、立ち上れないものゝやうである。これらの感官を使つて兒童は試み誤り訂正し、外界を一部分づゝ研究し自己の財産として行く。感官を通じて得らるゝものは、知識の根底となるもので、將來高等な知的作用の基礎となるものである。このものを心理學者は知覺と云ひ、知覺を構成してゐる要素を感覺

と言つて居る。近頃流行してゐる行動派心理學者の口吻をかりると、吾人は外界に對して反應するので、反應するにはその源となる反應させるものがある。反應させるものが、感官に活動し來ると、之を認めて吾々は身體で反應する。この反應させるものを認めた状態は知覺或は感覺である。されば知覺感覺は知識の中心として最も大切で、之がない時には知識は得られないのである。

兒童は生れると直ちに味を學び始める。生活に必要な營養物を食する爲に最も大切であるからである。生後三日目位に甘味と然らざる味との區別が出來甘味を喜ぶのである。神經系統が發達し練習を累ねるにつれ、味の種類や強さの區別を段々覺える。そして感覺の何れに於ても同様な發達があるので、しかも其發達は何れも迅速である。生後一ケ年間に大抵の感覺知覺は發達し、其後練習を累ね試験を積むに従て、其種類強度の區別が精密なるので、六才位の兒童には、成人の有つてゐる感覺の

大部分は出來上つてゐる。唯だ區別することが成人の如く精細でない丈で、其後もこの方面で發達します。嗅覺は生後一週日位で現れて來る。始めはよい匂と悪い臭との區別位であるが段々とこまかい區別が出来る。三才位の兒童では、成人よりも却て嗅覺は鋭敏で、辨別も鋭いのである。皮膚から生ずる種々の感覺は味嗅の二覺よりも發達は少し徐々としてゐる。しかし刺激に對して快であるか否かは、生れると直ちに知れてゐるが、その何であるかと云ふ感覺は少しもないのである。身體を洗ふ爲に湯や水へ入れられたり、種々の品物に觸れたりして、練習を累ぬるので、各種の感覺が發達して來る。高等な感覺程其發達は遅々としてゐる。聽覺の發達は徐々としてゐるので、始めは聾者と等しい状態である。生後一週日位經てから響と云ふ感覺が起り初める。聴くことが幼童に困難であることは永くついてゐる。これは又一方に大層有利なことで、生れたばかりの幼兒に

は睡眠と云ふことが最も必要である。若し成人の如く聴覚が発達してゐたらば、幼児は神經過敏に惱まされねばなるまい。しかし大きな響をぼんやりと響として感ずるのは生後數時間目から出来るやうである。とにかく赤兒は聴覚は發達してゐないので、赤兒に母親が種々やさしい詞ですかすも、之を聴くことは出来ない。さりとて赤兒をあやすことが無効であると考へてはならぬ。意味もない一様の響と聞えてゐた母親の詞も、度々聞くうちに他人と母親との聲を區別するやうになり、練習するにつれ聴覚は段々と發達するのである。視覚も同様である。光を感ずることは生後直ちに現れるが、視覚と云ふ現象は餘程後のことである。視野は一樣な光の視野で色彩も形體も距離も區別することは出来ない。練習を累ねるので段々とこれらが發達するのである。兒童を自然に放任しておいても、自然の發達、自然から與へらるゝ練習によつて、危険や障害のない限りは自然に發達し行

くものであるが、その發達を完全ならしめやうと云ふには、教育を施す必要があると思ふ。前に述べた通り感官の發達と感官の練習とによつて、其感覺及知覺は發達するのである。感官を廣義に使用して感覺器官やその關係してゐる神經系統を包含させやう。この方面が發達しなければ、感覺及知覺が發達しないことは明かであるから、その養護と云ふことは大切である。又一方には練習するから、感覺のこまかい區別が出来るやうになるので、この方面の練習は輕視することは出来ぬ。前者を感官の養護と云ひ、後者を感官の練習と名づける。此兩者は感覺及知覺の教育に最も大切な要素である。普通には感覺と知覺との區別を立てないで、兩語を同じ意味に使用してゐる。それでこの兩者を包括して感覺の教育と通俗に云ふが、實は感覺知覺の教育である。感官の養護は身體生理の問題に主として關係してゐるが、感官の練習は心理的事實の上に基礎を有つてゐる。そして練習

の結果うる心的現象は種々の性質強度の辨別が精緻となり、之を感ずる性質が鋭くなると云ふことである。故に辨別性を鋭くする様な練習がこの教育には最も大切である。小學校生徒であつて、眼は通常であるのに赤緑青黄の四原色や強い光と弱い光とを區別したり、之を言語で云ひ現すことの出来ぬものは可なり多い。しかし色盲患者ではないので、色彩の感覺は完全であるに拘らずかゝる現象がある。一部分は經驗しない色に遭遇して之れを云ひ現すことの出来ぬ爲でもあらう、又一部分は色は知覺してゐるが、其名前を知らないと云ふ色彩名辭の教育が不足と云ふ爲めでもあらう。しかし彼等には可なり多くの色彩名辭も知つてゐるし、可なり多くの色彩の區別も出来るのであるが、色彩と名稱とを聯合することが出来ないのに多くは基因してゐる。その根柢となる原因はかゝる練習が不足であると云ふことである。幼兒が言語を使用する前に既に感覺知覺上の性質の區別は、慥

かに出来てゐることは、多くの兒童心理學者の研究で明かである。色彩に對するこの無知が長く續くと視官の缺點はないに拘らず色彩辨別の異常を呈するので、之を救ふには視官の練習を心掛くるより外に道はない。他の感官でも同様である。

さて、兒童は五六歳頃迄に感覺及び知覺の方向の發達が略完成し、成人の感覺及び知覺の大體と似た程度まで發達するのである。唯個々の印象の性質強度の區別が成人の如く精細明確になつてゐない丈けである。されば此の時代殊に幼稚園時代の兒童には此の方面の練習が是非とも必要であると思ふ。最近にモンテソリー女史の教育法が重せらるゝのは種々の點からであるが、其一つとして感覺及知覺の練習に重きを置いた方法を取つたと云ふことも慥に一原因であらう。感官の練習と云ふことは、心理學上の意味で云ふと知覺感覺の辨別を鋭敏ならしむる練習をさせると云ふことで、かゝることが教育上殊に此方面の發達の途中にあ

る兒童に、最も必要であることは云ふ迄もない。其練習の方法としては辨別の練習を課することである。と云ふ事は心理學上の問題としては明かである。實際世人がこの方法を日常課してゐるのである。教育上の問題として今日に至つてモンテソリ―女史の方法が俄かに尊敬せられ、天來の福音であるが如くに歓迎せられると云ふのは、少し不思議に感ぜらるゝ位である。しかし日常吾人が兒童に課してゐた練習は、決して組織的のものではなかつた。これを組織的にしたと云ふ物は女史の榮譽として尊重せねばならぬ。

教育訓練と云へば直ちに教師が必要であつて、成人の知覺から流れ出た思想觀念を注入し、或は言語——始めは談話で後には文字によるが——の方法で之を兒童の腦裡に刻み込むことが最も重要で、此の方法によつてのみ兒童は正しい發達を遂げると思ふが、これは重大な誤謬である。勿論高等な文化を兒童に與へるには、言語と云ふ器具を

使用せねばならぬが、兒童が受くる初歩の教育訓練には教師も言語も必要ではない。何故と云へば感官から受けとる印象は即ち兒童が教育せらるゝ唯一の方法であるからである。兒童の經驗見聞知覺は悉く兒童の教師である。兒童に如何に立派な説明を授けても功がない。寧ろ兒童が自分で一個の品物に觸れ之を注視した方が其効果は遙に著しい。色彩の辨別音の辨別寒温の區別種々の味及其の區別明暗の區別等を始め悉くさうである。幼兒は教師なく、自分獨りで學問をしてゐる。この最も著しい例は遊戯である。されば次に遊戯と感官の練習と云ふことに就て話をしやう。(つゞく)